

MOFO BREXIT BRIEFING

<English follows Japanese>

2017年6月9日

2017年英国総選挙の結果：膠着状態か敗北か

執筆者：Sir Paul Jenkins*・Alistair Maughan

日本語訳作成：[藤平克彦](#)

6月8日の英国総選挙の結果を受けて、関心の焦点は、単独過半数政党不在の議会をもたらした選挙結果が何を示唆するのか、特にブレグジットに対して実際にどのような影響を及ぼすかに、移行した。ただちに現れる影響は、英国における政治的、行政的な不確実性の増大である。それは、順不同であれば、ポンド相場下落、「ハード・ブレグジット」の蓋然性の低下、ブレグジットの行程の遅延、そして一般的にブレグジットの交渉がより難しいものになることを意味する。ブレグジットの結果に対処する計画を立てようとしている企業にとっても、対応はより難しくなるだろう。

選挙後も保守党は引き続き最大政党ではあるが、過半数には足りない。北アイルランド民主統一党との協力により、保守党は壊れやすいながらも何とか過半数をかき集められそうだが、その差は一桁にとどまるだろう。

維持可能な政府を成立させるための取引

英国の離脱条件に関する英国とEUとの間の正式な交渉は、6月19日に始まる予定だ。しかし、英国の不文憲法の複雑さが、その交渉の前段階における諸課題において不確実性を増幅させ、何らかの成果達成は遅れることになるであろう。保守党は、議会における最大政党として、新内閣の組閣を試みる権利を有していることから、テレサ・メイは今日バッキンガム宮殿を訪れ女王陛下に組閣を試みることへの許しを求めた。ダウニング街に戻りメイ氏は自身が組閣を行うこと、およびブレグジットの実現に向けて民主統一党と協力することを宣言した。正式な連立協定は結ばれず、条件付の閣外協力の了解がなされるに過ぎないだろう。

新しい内閣にとっての次のハードルは、立法方針を実行に移すのに必要な下院における過半数を確保することである。偶然にも、立法方針の決議は6月19日か20日に行われると見込まれている。いささか難解な英国憲法上の表現であるが、「(立法方針の)決議は女王演説(クイーンズスピーチ)に基づいて行われる」ため、6月19日の新議会の正式な開会にあたり行われる女王陛下のスピーチにおいて明らかになるであろう政府の立法方針に注視

すべきである。また、民主統一党に対してどのような条件が提示されどのような条件が提示されなかったかに関して詳細が次第に明らかになってくるはずだが、かかる情報についても注視すべきである。

合意の成否ーブレグジットへの影響

どこまで詳細が公にされるかはともかく、民主統一党との合意には、ブレグジットに関する合意も含まれるだろう。保守党と民主統一党のどちらも、ブレグジットを推進せねばならないとする点で一致しており、他方で、重要なことに、アイルランド島内に強固な国境線を復活させてはならないという点でも一致している。しかし、両者を実現させることは、シングルマーケットへのアクセスを維持するか、または関税同盟を締結しなければ困難であるばかりか、実現は不可能であるという者すらいる。両党間の合意の中でブレグジットにどのような言及がなされるかを注視すべきである。保守党は、自身の交渉の余地に関して多くを知られないように、公表内容をできるだけ抽象論・原則論に止めようとするだろう。首相は、保守党内で最も強硬な方法でのブレグジットを求めるグループの要求を無視しきれないために、「移動の自由」に関してより柔軟な立場で交渉する余地を見つけるのに苦労することになるだろう。しかしながら、北アイルランドとアイルランド共和国との間の国境の取扱いに関する合意を民主統一党が達成できるように、労働者の移動の自由に関してより柔軟な表現が使われる可能性があり、その点に注視すべきである。

事業活動にとっての不確実性？

今回の選挙結果は、もともと EU との交渉がスタートすればそのすべてを覆うであろう不確実性のうえに、英国内で事業活動をするものにとってはさらに有難くないレベルの不確実性を付け加えるものだ。

現在のところ唯一明らかなことは、早期に次の選挙が行われな限り、英国は、新議会の数的要因による影響を受けやすい、以前よりずっと弱体な政権を以って、EU との交渉開始に臨まなければならない、ということである。今後の数週間のうちには、英国で事業を行うクライアントの方々のために、選挙結果が与える影響に関してそれぞれの分野・テーマに応じたガイダンスを差し上げられると考えているが、ここでは、背景事情に関して以下に簡単に述べておく。

英国総選挙の背景事情

メイ首相は、先月 [EU 条約第 50 条に基づく離脱手続き](#)を開始した直後に、解散総選挙の実施を発表した。解散前の議会では、与党が議席の半分を 12 上回っており、次の任期満了による総選挙まで 3 年が残されていた。しかし、世論調査によって、解散総選挙を行えば半分を 100 以上上回る水準まで与党の議席を伸ばせるかもしれないとされたことから、メイ首相は向こう 5 年間議会の絶対多数を得て、野党の反対や、さらにより重要な点として保守党内の欧州懐疑主義者のグループの反対にも悩まされずに政権運営できるかもしれないことに、魅力を感じた。従前はメイ首相自身が早期の解散総選挙は行わないと明確に述べていたが、首相は、ブレグジット交渉と、彼女自身の言によればブレグジットを完全に阻止しようとして来た一部の議員たちに対処するために、自身の権力基盤を強化する必要があることを、自身の考えの変化を正当化する理由とした。

選挙運動においては、国内の政治問題(と 3 件のテロ事件)のみが説明され、保守党と労働党の二大政党とも、ブレグジット交渉において、人の移動の自由への一定の制限と(それに必然的に伴うであろう)シングルマーケットからの離脱以上の何をしようとするのかについては、顕著に説明が不足していた。どちらの政党も国内の改革や財

政支出の立案を包括的に約束したが、ブレグジットが経済に与えるであろう影響や、ブレグジット後の英国議会の立法能力やその他の公共サービスの提供能力については、目を向けなかった。

ブレグジット交渉

ところで EU は、離脱コストに関する交渉プランの概要と、EU 加盟国民および英国国民の権利という予備的な問題に関する交渉プランの概要を作成し公表しており、いずれの概要も、透明性の点においてモデルとなるものであると自称している。しかし、実際にはどちらも EU 側の最初の要求として「高い透明性をもって」高めの要求を主張するものになっている。ブレグジットの時計は回り続けており、期限までに延長合意がなされない限り、ブレグジットへの崖っぷちはわずか 20 か月後にやってくる。

もし英国政府が単独で過半数を支配する与党が不在のまま政権運営を続ける場合には、英国政府の交渉能力はより弱いものとなり(かつもちろん EU もそれを知っており)、従っていわゆる「ハードブレグジット」の実現可能性はより小さくなるだろう。議会における新たな勢力図がどうなっていくかはまだはっきりしないが、英国の立場が弱くなることによって「ソフトブレグジット」が促進されることを期待している人々もいる。

もちろん、英国の政治システムが激動の中にあるためにブレグジット交渉が遅々として進まず、英国政府が 2 年間の交渉期限の延長を申請せざるを得なくなる可能性も(大きくはないがそれでもなお)排除することはできない。期限延長は、残る 27 か国の EU 加盟国の同意が無ければ認められないし、かかる同意を得るには英国は間違いなくその後の交渉の中で代償を支払わされることになるだろう。

どんなブレグジット合意にせよ、欧州議会と英国議会の承認を必要とする。このため、離脱条件、将来の関係に関する枠組み、およびブレグジットと新たな詳細かつ長期間の合意が成立するまでの間をつなぐ暫定的な移行措置に関する合意を締結する実質的な期限まで、すでに 18 か月を切っている。

意味のあるブレグジット交渉を英国と行うためには英国側で適切な組閣がなされることが必要であると、EU はすでに述べている。いつの時点でその条件が整うのか、現時点では言えないが、はっきりしているのは、テレサ・メイが求め、今回の総選挙で実現可能と考えていた、ブレグジット交渉に向けた強固な政治基盤の構想は、塵となって消えたということだ。そして、ブレグジット後の事業計画を模索する企業にとっては、憶測や不確実性に支配される期間が長引くことになった。

MOFO CONTACTS

ブレグジットに関連してご質問やご懸念の点がございましたら、お気軽にご連絡ください。

コンタクト:

和仁 亮裕

Akihiro Wani

東京

Tokyo

awani@mofo.com

Paul T. Friedman

ロンドン

London

pfriedman@mofo.com

大間知 麗子

Reiko Omachi

ロンドン

London

ROmachi@mofo.com

藤平 克彦

Katsuhiko Fujihira

東京

Tokyo

kfujihira@mofo.com

Alistair Maughan

ロンドン

London

amaughan@mofo.com

または

brexit@mofo.com

モリソン・フォースターについて:

モリソン・フォースターは優れた実績を誇る世界的な法律事務所です。クライアントには大手金融機関、投資銀行、Fortune 100 企業、テクノロジー・ライフサイエンス関連企業等が名を連ねています。American Lawyer 誌の A-List に過去 13 年間連続で選ばれただけでなく、Fortune 誌が「働きたい全米トップ 100 企業」として当事務所を挙げています。モリソン・フォースターの弁護士はクライアントのために最良の結果を出すことに全力を注ぐ一方で、より強固な事務所となるべく各弁護士の個性を失わないよう配慮しています。詳しくは、当事務所のウェブサイト (www.mofo.com) をご覧ください。

本稿は一般的なもので、ここに含まれる情報はあらゆる事案に適用されるものではなく、また個別の事案に対する具体的な法的アドバイスを提供するものでもありません。過去の結果が今後も同様に当てはまることが保証されているものではありません。

*Sir Paul Jenkinsについて:

2006年から2014年にかけて、Sir Paul Jenkins王室顧問弁護士は連合王国政府の最もシニアなリーガル担当官であり、ブレア首相、ブラウン首相及びキャメロン首相に助言を行ってきました。彼はブレグジットの進捗に関する鋭い観察者であり、現在は、Matrix Chambers (弁護士組織) で活動しています。

9 June 2017

UK GENERAL ELECTION RESULT 2017: STALEMATE OR CHECKMATE FOR BUSINESS?

By Sir Paul Jenkins* and Alistair Maughan

Following the UK General Election on 8 June, today the focus shifts to the implications of the election result that have led to a 'hung' Parliament – including, in particular, the likely practical effects on Brexit. The immediate effect is greater political and governmental uncertainty in the UK, which means, in no particular order, a weaker pound, a lower likelihood of a 'hard Brexit', delays in the Brexit process, and more difficult Brexit negotiations generally. Life just got harder for businesses trying to plan for the consequences of Brexit.

Following the election, the Conservative Party is still the largest party but some way short of an overall majority. Working with the Democratic Unionists from Northern Ireland, the Conservatives should be able to muster and sustain a fragile majority, but it will be in single digits.

Deal-making to achieve a viable government

Formal negotiations between the UK and the EU about the terms of the UK's departure are due to start in Brussels on 19 June. But the complexities of the UK's unwritten constitution will cast a cloud of uncertainty for businesses in the run-up to those negotiations, and delays in achieving anything meaningful are inevitable. The Conservatives, as the largest party in Parliament, have the right to see if they can form a new government; Theresa May has been to Buckingham Palace today to ask the Queen for permission to try to do so. Returning to Downing Street, Mrs May announced that she would be forming a government and working with the Democratic Unionists to deliver Brexit. It won't be a formal coalition agreement but merely an understanding of support subject to conditions.

The next hurdle for the new Government will be to secure a majority in the House of Commons for its legislative programme. Coincidentally, the date for a vote on the programme would be 19 or 20 June. Watch out for a particularly arcane bit of UK constitutional language: any vote will be on 'the Queen's Speech' – the Government's programme is set out in a speech by the Queen from the throne at the formal opening of the new Parliament on 19 June. But also watch out for any emerging details of what may or may not have been offered to the Democratic Unionists.

Deal or no deal – the impact on Brexit

Whatever details are made public, the agreement with the Democratic Unionists will cover Brexit. Both the Conservatives and the Democratic Unionists agree that Brexit must go ahead and, critically, that there must be no return to a hard border on the island of Ireland. Without access to

the Single Market or being part of the Customs Union, this is difficult, and some say impossible. Watch out for signs of what the deal says about Brexit. The Conservatives will hope it can be as high level as possible to avoid revealing too much of their negotiating hand. Having failed to free herself from those in her party who want the hardest of Brexits, the Prime Minister will struggle to find the negotiating space to soften her stance on free movement. Nevertheless, watch out for any softening of language on free movement of workers as a way through to give the Democratic Unionists a deal on the status of the border between Northern Ireland and the Irish Republic.

Uncertainty for business?

More generally for those doing business in the UK, the election results add an additional, unwelcome level of uncertainty on top of the uncertainty that will, in all events, hover over the negotiations with the EU once they actually start.

For the moment, the only thing that is clear is that, if an early further parliamentary election is avoided, the UK will enter those negotiations with a much-weakened government that is vulnerable to the new parliamentary arithmetic. Over the coming weeks, it should be possible to offer targeted guidance to clients doing business in the UK about that impact of the election. In the meantime, this is a brief reminder of the background.

Background to UK general election

The Prime Minister, Theresa May, called the ‘snap’ election last month shortly after she had triggered the [Article 50 EU withdrawal process](#). She had an overall majority of 12 in the Westminster Parliament and three years left to run before the next scheduled election. But, with opinion polls suggesting that she might increase that majority to over 100, she saw the opportunity for five years in power with a commanding majority, largely untroubled by opposition either from the other parties in Parliament or, critically, from the hard Eurosceptic wing of her own party. Going back on her many clear statements that she would not call an early election, she justified her change of mind by saying that it was necessary to strengthen her hand in the Brexit negotiations and to deal with those in Parliament who she claimed were trying to thwart Brexit altogether.

The campaign was dominated by domestic policy issues (and three terrorist attacks) and a marked lack of clarity about what either of the two main parties – The Conservatives and Labour – would seek from the Brexit talks beyond some controls on the free movement of people and, inevitably therefore, departure from the Single Market. Both parties promised a full programme of domestic reforms and spending, closing their eyes to the likely impact of Brexit on the economy and to the impact of implementing Brexit on the capacity of the Westminster Parliament and the civil service to do much else.

Brexit negotiations

Meanwhile, the EU has been preparing and has published negotiating briefs on the preliminary issues of exit costs and the rights of EU and UK citizens. Both briefs are claimed to be models of

transparency but are actually transparently high opening bids. The Brexit clock is ticking, and the cliff-edge Brexit is now only 20 months away unless a deal or an extension of time is agreed before then.

If the UK government is operating as a 'hung' Parliament (i.e., with no overall majority), the UK's negotiating mandate will be weaker (and the EU will know that, of course), and so it becomes less likely that a so-called 'hard Brexit' will be possible. It is not yet clear how the new parliamentary balance will play out but there are those who hope that the weakening of the UK's position will make for a softer Brexit.

And, of course, one cannot rule out the possibility (remote though that may still be) that the UK political system is in so much upheaval that Brexit negotiations proceed so slowly and unsuccessfully that the UK is forced to request an extension to the two-year Article 50 deadline. That could only be granted with the consent of the remaining 27 EU member states – and they would surely make the UK pay a price for that consent as part of any future negotiations.

Any eventual Brexit deal has to be agreed by the European Parliament and by the UK Parliament so, in reality, there is less than 18 months left to agree the terms of the divorce, the framework for the future relationship, and the transitional detail to bridge the gap between Brexit and a new, detailed, long-term agreement.

The EU has already said that there cannot be meaningful negotiations with the UK on Brexit without a properly formed UK government. It's impossible to say right now when that point may be, but the inevitable conclusion must be that the solid foundation to Brexit negotiations that Theresa May thought she would lay down with this election have crumbled to dust. And the result for businesses seeking to plan for a post-Brexit world is a prolonged period of speculation and uncertainty.

MOFO CONTACTS

Please do not hesitate to call with any questions or concerns you may have. We're here to help.

Contact:

Alistair Maughan

Co-Managing Partner, London

+44 (20) 7920 4066

amaughan@mofo.com

or

brexit@mofo.com

About Morrison & Foerster:

We are Morrison & Foerster – a global firm of exceptional credentials. Our clients include some of the largest financial institutions, investment banks, Fortune 100, technology, and life science companies. We've been included on The American Lawyer's A-List for 13 straight years, and Fortune named us one of the '100 Best Companies to Work For'. Our lawyers are committed to achieving innovative and business-minded results for our clients, while preserving the differences that make us stronger. Visit us at www.mofo.com.

Because of the generality of this update, the information provided herein may not be applicable in all situations and should not be acted upon without specific legal advice based on particular situations. Prior results do not guarantee a similar outcome.

***About Sir Paul Jenkins:**

From 2006 to 2014, Sir Paul Jenkins QC was the United Kingdom Government's most senior legal official, advising the governments of Prime Ministers Blair, Brown and Cameron. He is an acute observer of Brexit developments. Sir Paul Jenkins currently practices at Matrix Chambers.